

パリ通信・第152号

シラクーサからメッシーナへ

続・カラヴァッジョ

連日40°Cを超える灼熱のシラクーサから電車でメッシーナに向かった。シラクーサ始発ローマ行き各駅停車の長距離電車である。

ローマまで11時間、シラクーサ・メッシーナ間は約3時間。海岸線を速度50~70kmで走るので窓の景色も充分楽しめる。冷房も効いている。日本もフランスもTGVや新幹線ができて消えてしまったが、のんびりと安い料金の

長距離電車の旅は風情があって悪くない

と思った。シラクーサを出てカタニアが近くなると右手に真っ青な海と空、左手に標高3357mエトナ山の裾野が広がる。タオルミーナの湾にはパラソルを広げて海水浴を楽しんでいる人が見える。どんな小さな入江も水が澄んで家々には実を付けたオリーブの木、ブーガンビ



リエの赤い花、大きなサボテンが植えてあり美しい風景に見惚れている間に目的地メッシーナに到着した。

(ここまでの3枚の写真は編者が集めたもの)



メッシーナはシラクーサより大きな街だ。シラクーサの人口は13万でメッシーナは23万を超える。メッシーナ海峡を渡る大型フェリー、大型クルーズ船が港に横付けていた。シチリアに着いて以来空に雲が出ることはなく、湖が干上がってしまう程雨も降っておらず、メッシーナ市全域が水不足で、B&B（ホテルの名前）の方から水を大切に使うって下さいねと言われた。メッシーナもシラクーサと変わらぬ青空で40°Cを超え

る暑さだった。

朝食からグラニータ(かき氷シェイク)とブリオッシュが出た。シシリア名産のレモンとピスタチオ味は特に美味しく、一日に何度もカフェで涼んでは食べた。



そして念願のメッシーナ美術館カラヴァッジョ「羊飼いの礼賛」(1609)を見に行った。

B&Bからメッシーナ美術館までは1番のバスで20分。海が見える高いところにあり、所蔵品の数は少ない。

カラヴァッジョとアントネーラ・ダ・メッシーナ(1430頃-1479)が代表所蔵作品である。アントネーラ・ダ・メッシーナは名前の通りメッシーナ生まれでシシリアだけでなく、ヴェネツィアやローマなどでイタリア全土で広く活躍し、早くからフランドル絵画



アントネーラ・ダ・メッシーナ「受胎告知」(1474)



を知っていたルネサンス期の油絵先駆者である。シラクーサとメッシーナに1点ずつ「受胎告知」が残っている。

カラヴァッジョの部屋には1609年作「羊飼いの礼賛」と「ラザロの復活」がある。照明を抑えた暗い部屋には二つのソファが置いてある。メッシーナにいる間毎日9時開館とともにソファに座って1時間近く過ごした。警備の人に昨日も来ましたねと言われた。

「羊飼いの礼賛」はカラヴァッジョの中で一番好きな作品である。シラクーサで二ヶ月

月足らずで仕上げた「聖ルチアの埋葬」、次に描いたのがメッシーナの「羊飼いの礼賛」だ。この作品も人物の頭を結ぶ対角線を境に上部は暗い。福音書の記述通り牛とロバがい

る厩でキリストが誕生している。誕生したキリストは地面に置いたり、籠に入れたりとしてマリアから離されて描くのが一般的だが、カラヴァッジョの作品はマリアの両手に優しく大切に抱かれた図だ。マリアは紺藍色のマントの上に座りキリストの死を予告する血の色である赤い服を着ている。母親の目を追う幼子イエスを抱くマリアの姿は、貧しい土地シシリアで描かれた母親の至上の愛である。マリアの近くにはパンを入れた籠と大工道具が置かれ、ナザレのイエスとして家を建て働くことを告げている。そして画面の右下、藁が疎らな地面に一つの石が描かれている。見逃すことが多いですがとても大切な石ですよと美術館の方に教えていただいた。

「家を建てる者の捨てた石、これが隅（すみ）の親石となった」（詩編118:22からの引用）。自分自身はまもなく人々に捨てられる。しかし、神はその命(その死)を新しい建物の親石とする。「一粒の麦もし死なずば」と同じ意味を秘めた石である**

カラヴァッジョ・シシリア時代の作品はだんだんと死に近づいていく一人の個人の運命を予告しているかのように見える。今から415年前に描かれたにもかかわらず、現代の私た



解説

←左の写真は模写です。本文中の写真は古賀さんのカメラで撮ったものを縮小してあるため、大工道具（絵画の左下）と石（絵画の右下）がよくわかるように模写を探した。

「一粒の麦は地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」（ヨハネによる福音書12章24）

本文中角の親石が「同じ意味を秘めた石」であるとは親石と一粒の麦はいずれもキリストの十字架の贖罪死を意味する。新約聖書の奥義であると同時に福音の真理を表す言葉である。カラヴァッジョがどれほど深く悔い改め救いを求めたかを読み取ることができると編者は思う
小原靖夫記

ちに多くのことを語りかけてくる作品である。（古賀順子記）